

## ■ 書評 ■

## 『カラスの自然史—系統から遊び行動まで』

樋口広芳・黒沢令子編著, 北海道大学出版会, 2010年9月, 285頁, 本体価格3150円

評者は勤務先の公認学生サークル「野生動物生態研究会」の顧問として、とくに脱落する前の新入生が多い春先、鳥見に付き合う。今日は支笏湖。が、彼らセミプロ並の鳥見能力の前に、私の稚拙な鳥見能力などハナから期待されない。だから、宴会の準備に専念する学生と留守番をしている。すると、野営場に住み着くカラスがソーセージ、シカ肉、握り飯など、面白いように掠め取る(評者はこの原稿を作成しているので戦力にならない)。愛鳥家である当該サークル生が、必死の形相で投石や枯れ枝の槍を手で防戦するが、絶妙な間合いを取って食事にありつくカラスに、不思議と腹は立たない。むしろ、心の中で喝采している。ダメ顧問の腹もこの鳥のように黒くなったようだ。さて、プロの鳥類学者である本書執筆者陣(国外含め18名)には、このような低次元なものではないとしても、カラスに対しそれぞれ特別な思いがあったはず。さもなくば、敢えてあいつを選んだはずはない。p72の「コクマルガラス(以下、コク)が一番好き」というのも、好きになった理由を探したがやはり不明。されど、評者も留学中の英国生活で見かけたニシコクのクリクリ動く白眼が可愛いなあと思入ったし、ロンドンの地下鉄では「スリご用心!」のポスターに財布をくわえるニシコクの絵柄らが微笑ましかったので賛同しかけたが、日本のコクは眼が違うので翻るかな。

私事はこの程度で、本書はこの鳥の最新の引用文献も完備された総説集であるが、対象種は偏り、ハシブトガラス(以下、プト)とハシボソガラス(以下、ボソ)が大部分、これにミヤマガラス(以下、ミヤ)一章分とワタリガラス(以下、ワタ)少々が加わる。これら4種の頭や嘴のシェープやその根本の羽毛の有無などを絶妙に語らせた写真(ただし、モノクロで十分)がカバーに掲載

されているので、決して、無くさないように。本文は4部構成で1「系統と進化」(日本産カラス科他種についてもmtDNAの系統樹上に登場しているのでご安心を。なお、プト・ボソのユーラシアを舞台にした雄大な生物地理は圧巻)、2「生態分布と環境利用」(プト・ボソの農村・都市における分布と、最近、ミヤがはびこる理由)、3「食生活と生態系内の役割」(プトの都市部でのリン等栄養塩循環、または伊豆諸島での果実利用と個体群サイズ、ボソの海岸部での食性利用、プトの地域別餌資源の色々)、4「社会と行動」(伊那谷と大阪でのねぐら調査、個体間の優劣関係、識別能力に関する行動実験、ワタリ含む〈遊び〉とヒトとの共生に関しての歴史的俯瞰)であった。とくに、本書でもっとも力点が置かれたのは第4部で、要するに、カラスの仕草が如何に面白いかということ伝えんがため、本書が作られたことは歴然である。編集的なことで、本質的なことではないが、第3部最後の地域別のユニークな餌資源利用(ツブ貝、クルミ、石鹸など)の習性のトピックは、第4部にあった方がしっくりするような気がした。だが、これら習性の話が面白いことは間違いない。ただ、面白がってばかりはいられない。謎の不審火が墓地の火の付いた蠟燭を「貯食」したことが原因との言説は(p133-134)、重大事である。著者で編者でもある樋口教授が、かつて、ご自身で解明された「線路置き石事件」などについても本書に付加され、惨事を防止するという社会的貢献で展開する方法もあったらうに。評者の専門である感染症という面でも、一切、触れていないのは、むやみに危機感を煽り立て、この黒い奴の立場を、これ以上、悪くしないための心遣いなのであろうか。

(浅川満彦/酪農学園大学)